

*修士論文中間報告会（11.00–12.00, 13.40–14.40）のアブストラクトはありません。

研究発表 14.55–16.15

[司会: 福島彰利（甲南大学）]

1. 弁別素性の役割と重要性について：再考－英語の屈折変化と OCP 原則及び隣接性の関わりから－

西原哲雄(追手門学院大学)nisiharate@gmail.com

本発表では、Chomsky and Halle(1968)に基づく生成音韻理論(Generative Phonology)や Sagey(1990)などによる、弁別素性理論(Distinctive Theory)などの音韻理論における重要な概念、要素となっている弁別素性(distinctive feature)の適格性を Leben(1973)で指摘され同一形態素内での同じ音調パターンの連続(後には適用領域は拡大解釈された)を禁止した制約である OCP 原則の関わりの観点から、失語症患者発話のパターンや、英語の屈折接辞の生起状況に基づき、論証するものである。

日本語話者の失語症患者の発話では、笹沼(1978)などで示された、その逸脱のパターンが弁別素性の値によるものでかつ、誤りである音素と正常な発音との弁別素性の相違は、1 つまたは 2 つであり、4 つの弁別素性の値の相違で引き起こされる例はおおよそあり得ないことから弁別素性の存在・機能していることの妥当性を明確に提示する。

そのうえで、英語の複数を示す語尾変化の連続生起(繰り返し性)について Borowsky (1987)では、manner node の弁別素性である継続性素性[continuant] などや primary node である舌頂性素性[coronal]と OCP 原則の関係での説明が適切であり、secondary node である前方性素性[anterior]と OCP 原則の関係での説明は適切でない指摘している。

しかしながら、Lombardi(1990)では、継続性素性[continuant]などでは、paths のような複数形の屈折接辞付加に、OCP 原則により誤った母音挿入を誘導し、的確に事実を説明できないことを提示したことから、manner node の 1 つである弁別素性の粗擦性素性[strident]と OCP 原則による説明が適切と考え、本発表でも、この枠組みを援用する。

そこで、通常の派生接辞ではその生起の連続性が認められるが、屈折接辞の生起の連続が阻止される現象を語と屈折接辞との OCP 原則の適用で説明が可能である(例えば、*boys's → boys'のような複数接辞と属格接辞の例)いう事を確認したうえで、このレベルでの分析が不十分であることを以下に指摘する。Mohanan (2003)で示されたような英語では特殊な語尾変化(二重複数)を持った単語の例である、childrens (child + ren + s)は粗擦性素性[strident]の弁別素性と OCP 原則を援用することで、childrens の例での複数屈折接辞と属格接辞の連続の適格性と、通常の屈折接辞連続の不適格性

(*boys's → boys')を区別して、屈折接辞の連続性を認めないという制約が、語レベルと接辞レベルではなく、弁別素性のレベルであることやその適用レベルに隣接性に関わることを明示する。

2. 「動詞連用形+名詞」複合語のモノとコトの関係について

高橋勝忠（京都女子大学名誉教授）

「動詞連用形+名詞」複合語には（1）に見られるように、「忘れ物」にはモノとコトの意味がある。一方、「食べ物」には（2）に見られるようにコト的表現は不可能で、モノの意味の使用のみ認められる。

- （1）a. 電車に忘れ物をした—コト
b. 駅の事務所に忘れ物を取りに行った—モノ
- （2）a. *カフェで飲み物をした。—コト
b. カフェには様々な飲み物が用意されていた。—モノ

モノやコトは解釈的には事象解釈、個体解釈と呼ばれるが、「動詞連用形+名詞」複合語の先行研究として小野（2014）杉岡（2020）ではどのような表現がコト名詞になり、モノ名詞になるかについて議論が交わされてきた。小野（2014）ではクオリア構造を使用して主体役割の情報を読み取って「忘れ物をする」の合成述語が出来ると仮定する。一方、「*飲み物をする」と言えないのは飲むという行為は「飲み物」の成立要因ではなくて目的役割である。したがって、「忘れ物」のように、モノからコトへのタイプシフトは生じない。杉岡（2020: 11）は「洗い物」や「買い物」が動詞の主体役割で派生されないが「洗い物をする」や「買い物をする」の事象解釈ができる反例をあげる。杉岡（2020: 18）は右側主要部の形態規則と同様に左側の動詞の意味的要素が事象解釈を得られるという捉え方をする。この分析では形態と意味に基づく主要部の捉え方の理論的關係が見えてこないという問題が生じる。

高橋（2011: 22）では、「スル」は接尾辞として捉え、（3）のような環境で生じると提案する。

（3）「～する」：V, [+N ____]（ただし、Nの範疇は「活動」「行為」を表す漢語動名詞と動詞由来複合語である）

また、「動詞連用形+名詞」複合語は基本的にはモノ名詞であり、影山（1999：52）が指摘するように語根複合語（=primary compound）になる。したがって、（4）のようなモノ名詞の諸例は「スル」ととらないことが説明できる。

- （4）入れ物、食べ物、残り物、飲み物、持ち物、巻き物、割れ物、など。

本発表では、コトを表す（５）の「動詞連用形+名詞」複合語が、（４）と同様に「スル」が付加しない事実（e.g. *忘れ物する）を指摘し、これらの事実は高橋（2009）で提唱した NCC（Noun Category Condition）で統括して説明できることを主張する。

（５）贈り物、落とし物、買い物、書き物、調べ物、拾い物、忘れ物、など。

また、（1a）に見られる「忘れ物をする」が可能になるのは、「ヲ格」が入ることにより形態論から統語的操作に移行し、NCC の形態規則が働かないで名詞句操作に移行することによる帰結であると提案する。この提案によって、「*メアリーは目を{する/している}」は不適格で「メアリーは{怖い目をする/青い目をしている}」が適格である事実や、[V+方]表現で「*メアリーはキレイな食べ方する」は不自然で、「メアリーはキレイな食べ方をする」が可能になる事実や、目的語複合語の「*布団たたきする」が不適格で「布団たたきをする」が可能になる事実が統一的に捉えられる。

主要参考文献

- 小野尚之（2014）「N をする」構文における項選択と強制」『複雑述語研究の現在』岸本秀樹・由本陽子（編），17-40，ひつじ書房，東京。
- 影山太郎（1999）『形態論と意味』くろしお出版，東京。
- 杉岡洋子（2020）「動詞連用形+名詞」複合語の多義について」『名詞をめぐる諸問題—語形成・意味・構文—』，由本陽子・岸本秀樹（編），2-23，開拓社，東京。
- 高橋勝忠（2009）『派生形態論』英宝社，東京。
- 高橋勝忠（2011）「動詞連用形の名詞化とサ変動詞「する」の関係」『英語英米文学論輯』（京都女子大学大学院研究紀要）第 10 号，15-33。